

横芝の碑 (その二十一)

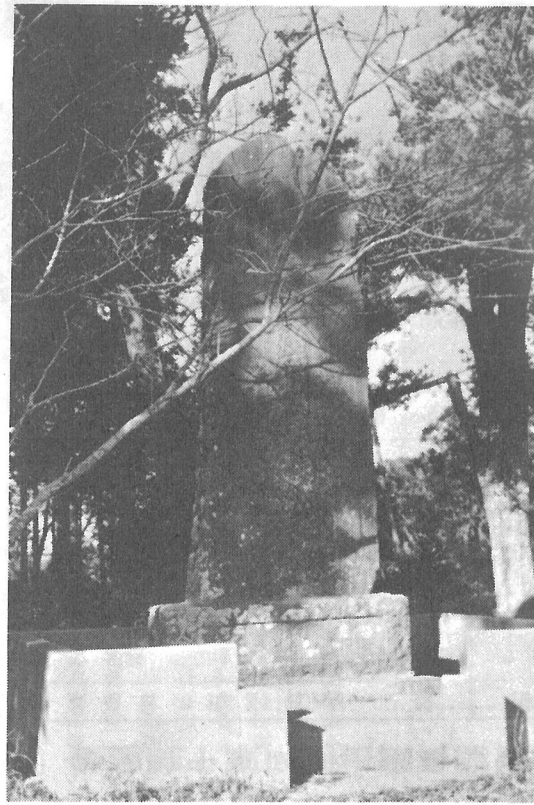
乃木將軍揮毫の碑

梅雨曇の或日、新島の田中さんという婦人から「何時か広報に載った機転の地蔵様の祠を改修したところ、胴体だけの石仏が発見された」という話をお聞きしたのでバイクを走らせて見ました。おとなしく県道を行けば良かったのに近路をしようと横路に入ったのが失敗で、何時の間にか全く方角も解らない田圃路に入って終いました。苦心惨澹ようやく本道らしい道に出たのでほっとしたその鼻先に石の鳥居が建っていて、それが新島の二所神社でした。とに角一休みしようと参道に入っ

と見ます。そして、海の東郷大将、陸の乃木大将というと無条件で尊敬したものです。特に乃木大将については自分の部下が多く戦死し

敵の將軍ステッセル、乃木大将と会見の、所は何処水師營しという水師營の会見の唱歌を声張り上げて唄った気憶はきつと忘れていないと思います。

乃木大将は、部下の顕彰碑の外は殆んどの揮毫を断り続けておられたということです。従って大将の筆蹟を求めるとすれば、まず日露戦役の記念碑が表忠碑以外は難



入って見ますと、鳥居のすぐ横に一基の碑が建っているのが目に付きました。碑は高さが六十糎位の石垣で囲まれていましたので、格好の腰掛と何気なく碑を見上げますと、陸軍大将及木希典という文字が目に入ってきました。昭和の始めまでに生れた男の人は、みんな兵隊ごっこをやった覚えがある

たというので「我何の顔あつて父老に見えん、凱歌今日幾人か還る」と苦衷を詩に賦し、また「うつし世を、神去りませし大君の御あと慕いて、我はゆくなり」と辞世を残して明治天皇に殉じられた心憎等は、私達に大変な感銘を与えたものです。小学校国語読本で教えられた一旅順開城約成りて

かしいというのです。いまその一つが目の前に現れたということは一吋と信じられない位でした。しかし、何度読み返しても間違いないのです。乃木大将は旅順攻撃の第三軍司令官でしたから、この碑に刻まれている人々の多くは旅順攻撃に参加されていることと

る中に、今まで雨足が立ちそうであつた雲が突然切れ目を見せて、碑の表にうす陽を投げかけて来ましたので、夢中で続けざまにシャッターを切ってしまいました。そして機転の地蔵様には「又の日」と逢かにお願いをし帰路についたのです。

写真は、その碑で表面上部篆額には凱旋記念之碑、と二字宛、横三行、その下の右側には、陸軍大将正三位勲一等功三級男爵乃木希典、中央から左にかけては、明治参拾七、八年戦役従軍者、明治三十九年九月、三輪 環書とあり、更に下段には、真野恤蔵、伊東弥

市、山本庄一郎、秋山源蔵、川島豊三郎、阿蛭要蔵、大木茂三郎、秋葉徳太郎、伊藤潤、伊藤喜郎、吉原友治郎、伊東保三、伊藤勝平、阿蛭栄治郎、伊藤 卓、伊藤俊治、山本辰治郎、秋葉寅治郎以上一八名の方の氏名が刻まれています。氏名に次郎という文字が使われず全部治郎となっているのも明治の御世だったからでしょうか、碑の背面には碑建立の寄附者が伊藤伊三郎氏の二十円也を始め九十余名の氏名が連ねてあり、明治三十九年九月之建と刻まれています。(養護老人ホーム小沢所長寄稿)

